様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２８ 日現在

機関番号：３４５２３
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｈ０２３２７

研究課題名（和文）観光化が進む世界遺産の歴史的都心における住環境の変化と課題の考察

研究課題名（英文）Examination of the Changes and Challenges to the Living Environment in the Historic Downtown of World Heritage Sites as Tourism Increases

研究代表者
吉良　森子（kira, moriko）

神戸芸術工科大学・芸術工学部・客員教授

研究者番号：１０７３９８４０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　11,720,000円

研究成果の概要（和文）：歴史的都市中心を暮らしの場として維持・展開することが、持続可能な観光産業を育てる。「定住者」（住民）だけでなく「非定住者」（観光客・リピーター・多拠点居住者）も「定住者」と共に歴史的都市の固有性の維持・展開を支える存在である。都市・村・集落の規模に関わらず「観光」はこれからの社会的活力の維持・展開のための重要な産業、文化事業であり「非定住者」も社会と文化の担い手だ。これからは「観光」を「インフラ」「産業」「住民の福祉」「環境」「文化」とともに包括して考える「都市マネジメント」が必須であり、それぞれの都市の文化と仕組みを反映しながらその方法が試行錯誤されている。

研究成果の学術的意義や社会的意義
この研究では社会・文化・歴史的に大きく異なる４つの都市を調査することで歴史的都市における観光産業の多様な社会的インパクトと対応を分析する機会を得た。日本の国際的マスツーリズムの歴史は浅く「住民」対「観光客」の構図で捉えられるが、各国の調査から観光と暮らしを統合して考える都市マネジメントの必然性が明らかになった。歴史的都市のマネジメントは都市の幅広い文化と歴史を基盤として形成される。例えばアムステルダムでは市民・自治体・事業者が共同して取り組んでいる。今後１０年程度の射程で各国、各都市で様々な方法が考えられ、その結果が明らかになると考えられ、客観的かつ総合的な評価を続ける必要がある。

研究成果の概要（英文）：Maintaining and developing historic urban centers as living spaces is key to nurturing a sustainable tourism industry. Not only "residents" (inhabitants) but also "non-residents" (tourists, repeat visitors, multi-location residents) are those who support the maintenance and development of the unique character of historic cities alongside residents. Regardless of the size of the city, village, or settlement, "tourism" is an important industry and cultural activity for maintaining and developing future social vitality, and "non-residents" are also social and cultural supporters. From now on, "urban management" that considers "tourism" together with "infrastructure," "industry," "resident welfare," "environment," and "culture" is essential, and methods are being tried and tested while reflecting the culture and system of each city.

研究分野：建築学およびその関連分野

キーワード：観光都市の持続性　歴史的都市の持続的発展　グローバル時代の観光と都市居住のバランス

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

近年、急速にグローバルな観光が発展した結果、各地の「歴史的都心」(historic urban center)には、ホテルや民泊、観光客を目的とする商業施設が急増している。本研究で述べる「歴史的都心」は、京都市に代表されるような、伝統的景観と住生活が共存しながらも、国際的な観光地としての繁華街を有する地区である。

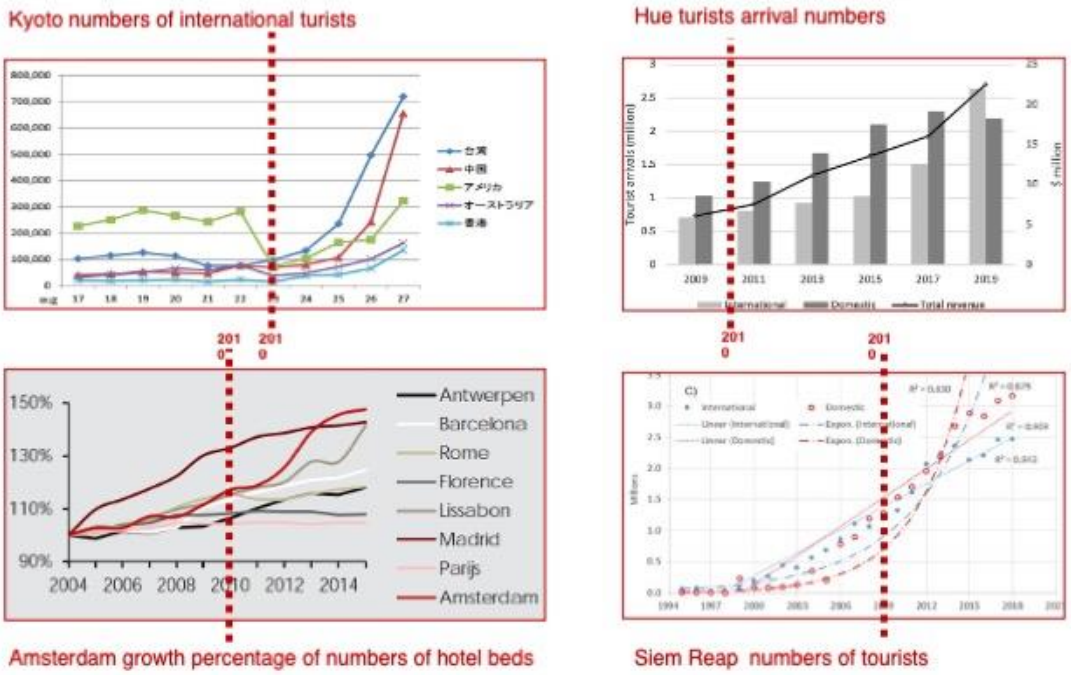
歴史的都心では、通常の住宅や市民を対象とした商業施設よりも、観光インフラへの投資に利益が期待できるため、ホテルの建設、集合住宅からホテルへの機能転換、民泊の広がりが急速に進んでいる。結果、市民が住むことのできる住宅が減少し、賃料・分譲価格が高騰している。生活を支えてきた小売店が観光客を対象とする店舗となり、日常生活のための施設が減少することで、歴史的都心は暮らしにくい場所になってきている。

この現象は、特に世界遺産指定などによって注目を集める都市及びその周辺地区において顕著である。歴史的都心の建造物は、文化財として保護されている場合が多く、住民のための住宅・施設から観光客のための施設に変わる場合でも、建造物自体は壊さず内部だけが改装されることが多い。そのため、景観への変化はないが、上述した、暮らしにくさに加えて、都市と無関係な不特定多数が日々景観を消費している状況に、住民は違和感や疎外感を感じ、歴史的都心での生活を諦める人も増えている。

申請者らが、カンボジア・シェムリアップの歴史的都心で実施した調査では、店舗併用住宅として建てられた約 400 戸のうち、現在も住居として利用されている割合は、約 25%に留まることがわかっている。長い時間を経て育てられた歴史的都心を担う共同体は、街並みという物理的な形態だけを残し、それを生み出してきた文化の担い手を急速に失っている。しかしながら、グローバリゼーションによる観光産業の飛躍的な発展は、その歴史的景観自体が大きな吸引力となっているために、これまで景観を生み育ててきた住民の社会生活と景観そのものの関係を疎外するという皮肉な現象に直面しているのである。

歴史的都心を観光産業のための場とすることを受け入れるのか、住民の社会生活の場としてこれからも更新し、新たな歴史を積み重ねていく場であることが望ましいと考えるのか、歴史的都心の持続可能性の視点から、観光産業の発展の先にある都市の姿を描くことが求められている。

2010年以降の観光客増加は世界的なものである



観光が歴史的都市空間に及ぼす状況・観光客の振る舞いはあまり変わらない

Kyoto

Hue

Amsterdam

Siem Reap

出典　　統計は各都の市当局資料 写真　個人撮影

２．研究の目的

本研究では、住民が疎外されない歴史的都心をどのように維持、展開していくのかを建築計画の視点からビジョンと戦略を考えることを目的とする。住民の社会生活の機能に対して観光産業のための機能の割合が増加し社会生活の場が減少することによって、都市を更新してきた担い手を失うと、ダイナミックで多様性のある生活や文化の積み重ねによってできた歴史的都心は、変化の方向を見失い、持続可能性を失うと考えられる。観光産業は、社会的な状況のみならず、観光客自体が求める場所や目的が常に変化するため、観光中心の都市の未来像を描くことには大きなリスクがあり、都市の多様性を追求することが歴史的都心の持続性を確かなものとすると考える。

具体的には、グローバルな観光発展によって住生活が大きく変化している、世界遺産周辺の歴史的都心である、アムステルダム、京都、シェムリアップ、フエの４都市を対象として、観光による住機能の変動とそれに対する政策、住民意識の変化を明らかとする。従来、観光の発展が都市の持続性の錦の御旗のように追及されてきたが、住民の能動的かつ固有な都市生活の創造が観光の魅力となるような仕組みを学術的に明らかにすることが問われている

３．研究の方法

各都市の歴史、世界遺産としての価値評価、社会的状況が異なるため、それぞれの状況を分析しながら特有の問題点と可能性を把握しながら現地での視察を計画し、観光の影響を受ける住民と住民組織、観光を生業とする事業者、観光政策を統括する自治体などそれぞれの都市の状況に合わせてインタビューと視察を行なった。

各都市の状況の分析は以下の通りである。

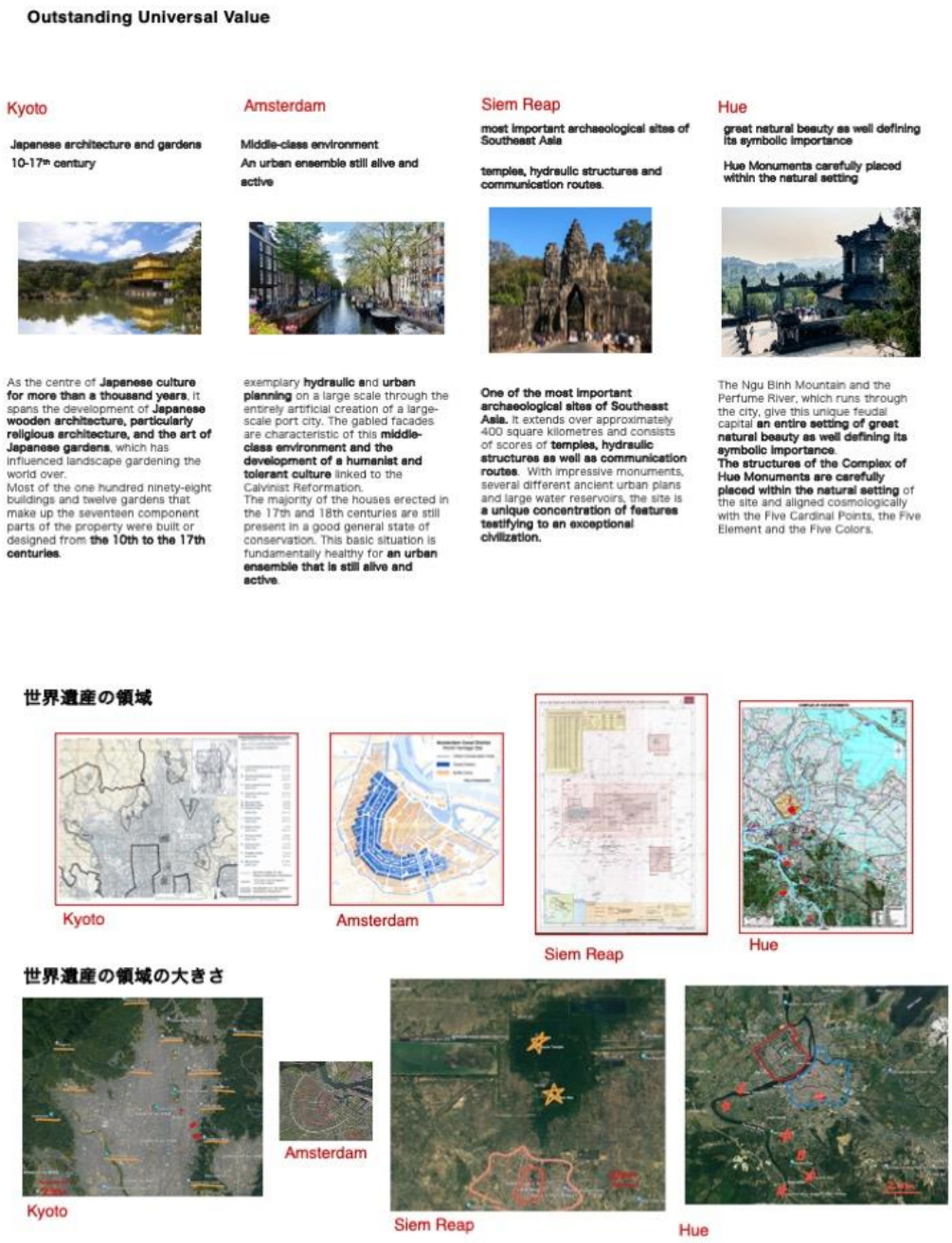
＜京都＞

京都の卓越した価値として世界遺産として認識されていない、町家の街並みを特徴とした、市街地の暮らしの場の建築と景観が大きく変化している。京都町家の破壊は進み、その後に大規模なマンションやホテルが建設されている。市民の暮らしも変わり、京都町家が現代の暮らしとのずれが大きくなっている。同時に「京都の暮らし」に興味を持つ観光客や多拠点居住者の影響で町家が維持、改修されることも増えている。

＜アムステルダム＞

アムステルダムの歴史的レンガ造の町家は文化財法によって保護されているので歴史的市街地の街並みはほとんど変化していないが、ホテルや民泊に変わるものが増え、かつ、店舗も観光客目当てとなり、不動産価格も上昇し続けているため、アムステルダムは中産階級の街から観光客と大金持ちの街に変わりつつある。市当局、住民ともにこの状況を問題として捉え、様々な話し合いや政策が実施されているが現段階では有効性のある解決策は提示されていない。

＜シェムリアップ＞
観光化が２１世紀における重要な基幹産業であり、インフラ、教育、職業選択の自由を始め、２０世紀に近代化のチャンスがなかった場所における観光産業の重要さをシェムリアップでは認識することができる。その結果、シェムリアップ周辺は劇的なスピードで都市化を続けており、これまで人々の生活とのつながりがあった、クメール王朝時代との歴史とつながる、ため池、運河といった水のインフラが見えにくくなっている。
＜フエ＞
観光化が進み、市街地の建物の更新も進んでいるが、宮城内は３階建という高さ制限があるため高層化されず、建物の粒も大きくならないので、現段階の更新には住民の暮らしの変化を反映した、歴史的に連続性を感じることができる。
世界遺産として特有の価値として認められている、山の風景と川からなる世界観を示す風景が今後の都市化の中でどのような意義を見出すのか。ベトナムではインドと中国の文化の影響を受けて、風水思想の命脈がある。自然・生死・社会を統合する風水思想は近年新たに欧米社会においても注目されている。アグリツーリズムなど都市観光だけでなく、自然の世界観から都市が形成されたアジア文化特有の観光と今後の発展の可能性が見られる。



出典　outstanding value 及び地図　UNESCO World Heritage Convention　領域地図　自主制作

４．研究成果

私たちは歴史的都市の都市としての持続性を考える上で、私たちは以下の点が前提であると考えた。

1　歴史的都市中心は、暮らしの場として展開し続けることができなければ、都市としての価値を維持することはできない。ある時代の都市の様相だけが保持され、観光のための機能だけが残り、暮らしが消えた場所はテーマパークである。

2　都市は、常に変化し、展開する。それは世界遺産として認められた歴史的都市も同じである。そして、世界遺産として認識された「卓越した価値」と現時点での文化的風景・都市景観と建築が、それぞれの場所の現時点での固有の性格の基盤であり、それらを包含し、際立たせる変化と展開が求められている。歴史的都市の価値や性格を尊重しながら、２１世紀の暮らしと活動の場として、変化や展開を受け止めることは必然である。

3　今日の観光は、目的、滞在期間・種類、意識など非常に多様であり、観光の都市への影響を正確に捉えるために、「定住者」（住民）に対する「非定住者」（観光客・リピーター・多拠点居住者）として捉えることが望ましい。都市・村・集落の規模に関わらず、「観光」はこれからの持続的な社会的活力の維持･展開のための重要な産業であり、文化的事業の一つである。「非定住者」もその場所の社会と文化の担い手である。

4　「観光」を契機として訪れる人たちは、その場所の歴史・文化・景観などその場所の価値を体験することを目的としてやってくる。他の場所とは異なるかけがえのない場所として展開してきたもの・こと・様相が彼らの興味の対象だ。そのことが将来的にその場所の固有性の維持・展開を阻害する可能性もあるが、ポジティブなエネルギーと捉えることもできる。

その上で、私たちが導き出した結論は以下の通りである。

1　歴史的都市中心の都市空間を消費する観光産業と住民の暮らしをどのようにバランスをとっていくのか。これは歴史的都市中心が共通して抱える課題である。観光を必須な産業として受け止めながら、住民が市民としてのアイデンティティと帰属意識を保ち、さらに生活を維持、展開するためには「観光産業」のマネジメントは必須である。誰がその主体となるのか、どのように行なっていくのかはそれぞれの都市の成り立ちやシステムによって異なるが、マネジメントしなければならないことは共通している。

2 「観光産業」の持続性は、その都市の文化・環境に対するビジョンなしには成立しない。さらに、観光産業は、それぞれの都市のインフラ、住宅、働き方など都市生活の様々な領域に影響を与える。言い換えれば、観光を都市マネジメントの重要な軸として捉えることで、これまで統合されることなく考えられてきた「インフラ」「産業」「住民の福祉」「環境」「文化」を包括したビジョンを作成し、実行する方法を模索するチャンスと捉えることができる。

3　観光を念頭においた都市マネジメントは、誰がどのようなリーダーシップを取るのか、どのように展開するのか、はそれぞれの社会システム、文化などによって異なるが、政策・住民のイニシアチブ・市民のコンセンサス・事業者の啓蒙と理解と誘導といった複合的なマネジメントが必要となる点は共通している。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計7件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 黒岩千尋，中川武，小岩正樹	４．巻 87
２．論文標題 フランス領インドシナにおける歴史的記念物に関する制度と「アンコール考古学公園」創設の特質	５．発行年 2022年
３．雑誌名 日本建築学会計画系論文集	６．最初と最後の頁 232 241
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 黒岩千尋	４．巻 94
２．論文標題 フランス領インドシナにおける「歴史的記念物」保全の組織化とその変容	５．発行年 2024年
３．雑誌名 日本建築学会関東支部研究発表会報告集	６．最初と最後の頁 607 610
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 黒岩千尋	４．巻 70
２．論文標題 1920年代後半～1940年代のフランス領インドシナにおける「歴史的記念物制度」	５．発行年 2021年
３．雑誌名 史標	６．最初と最後の頁 9-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 黒岩千尋	４．巻 68
２．論文標題 「インドシナの『歴史的記念物法』と『アンコール公園』の創設	５．発行年 2021年
３．雑誌名 史標	６．最初と最後の頁 19-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 黒岩千尋，中川武，小岩正樹	4．巻 59
2．論文標題 「仏領期シェムリアップにおける宿泊施設の計画について―カンボジア・シェムリアップのツーリズム拠点としての発展過程―」	5．発行年 2019年
3．雑誌名 『日本建築学会大会学術講演会梗概集』日本建築学会	6．最初と最後の頁 403-404
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 小浦久子	4．巻 2019
2．論文標題 「変化しつつ持続する城崎らしさ」	5．発行年 2019年
3．雑誌名 造景	6．最初と最後の頁 14-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 小浦久子	4．巻 2021
2．論文標題 「ローカルをつくる」	5．発行年 2021年
3．雑誌名 日本建築学会大会都市計画部門研究協議会資料	6．最初と最後の頁 36-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　0件／うち国際学会　2件）

1．発表者名 黒岩　千尋、中川　武、小岩　正樹
2．発表標題 仏領期シェムリアップにおける宿泊施設の計画について -カンボジア・シェムリアップのツーリズム拠点としての発展過程
3．学会等名 2019年度日本建築学会大会学術講演会、金沢工業大学
4．発表年 2019年

１．発表者名 黒岩　千尋、中川　武、小岩　正樹
２．発表標題 Siem Reap / Angkor -The formative process and a sustainable development as a tourism station
３．学会等名 メコンがつなぐ文化多様性 ― 東南アジア文化遺産研究の現在 ―、文化庁・早稲田大学文化財総合調査研究所主催
４．発表年 2020年

１．発表者名 黒岩千尋
２．発表標題 Transition of the systems and organization of "Historic Monuments" in French Indochine during 1900s-1940s
３．学会等名 SPAFACON2024（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 黒岩千尋
２．発表標題 The transformation of the spacial composition of Siem Reap/Angkor during 1900s to 1930s
３．学会等名 ISAIA 2022（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 フランス領インドシナの「歴史的記念物」制度と「アンコール考古学公園」のツーリズム拠点化
２．発表標題 黒岩千尋
３．学会等名 東南アジア学会
４．発表年 2022年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	小岩　正樹 (Koiwa Masaki) (20434285)	早稲田大学・理工学術院・准教授 (32689)	
研究分担者	小浦　久子 (Koura Hisako) (30243174)	神戸芸術工科大学・芸術工学部・教授 (34523)	
研究分担者	木谷　建太 (Kitani Kennta) (50514220)	早稲田大学・理工学術院総合研究所（理工学研究所）・その他（招聘研究員） (32689)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計1件

国際研究集会	開催年
Workshop in Siem Reap and the Angkor Ruins Living with Water	2024年～2024年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関